

本川 裕

北前船経済圏の歴史的意義
～統計データ分析家によるルーツ探訪～

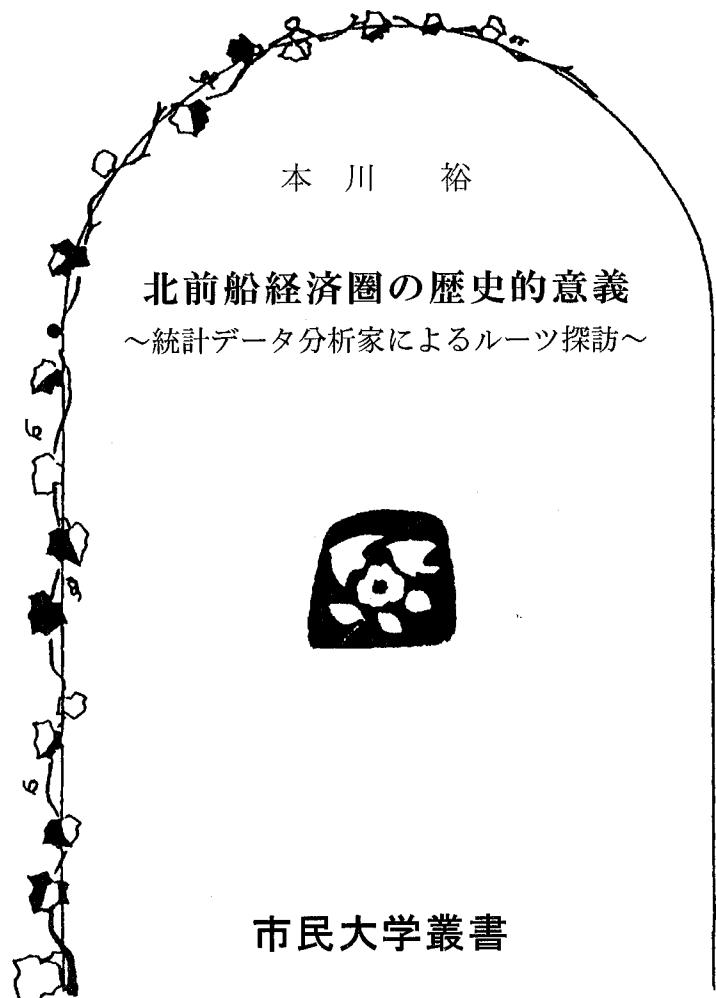


北前船経済圏の歴史的意義
～統計データ分析家によるルーツ探訪～

本川 裕

市民大学叢書 85

富山市教育委員会



本川 裕

北前船経済圏の歴史的意義

～統計データ分析家によるルーツ探訪～



市民大学叢書

目 次

はじめに（私のこと）	1
1 富山の人の好むもの	10
2 北前船が運んだ昆布	14
3 ニシンとともに栄え、 ニシンとともに衰退していった北前船	20
4 北前船輸送によって全国一になった新川木綿	27
5 北前船経済圏の歴史的意義	29
卷末資料	37

はじめに（私のこと）

みなさん、はじめてまして。本川といいます。本日は富山市民大学の開講式にお招きいただきありがとうございます。

北陸の皆さんを前にして、北陸人ではない私が、歴史家でもないのに、北前船のことをお話することになったのはどうしてかということからお話を始めたいと思います。

私は、大学・大学院で農業経済という分野を勉強した後、当時はかなり知られた財団法人国民経済研究協会というシンクタンクで長年研究員をしておりました。企業や行政から様々な調査を依頼されたり、計画づくりのお手伝いを依頼されたりして、調査活動に従事してきました。2004年に、このシンクタンクが財政的に苦しくなって解散することになり、私は、最後の常務理事として店じまいの事務を引き受けて実行しました。その後、知り合いの事務所に机を置かせてもらいフリーの研究員として、相変わらず企業や行政からの受託で調査を行っています。また、これまで行った様々な調査の経験を社会人大学院で教えて欲しいという依頼を受け、現在、立教大学で「リサーチ・ビルディング」という講義を受け持つ

ています。

それと同時に、個人として、ネット上で、「社会実情データ図録」という情報サイトをつくり運営しています。これは10年前、財團が解散することになり、それまでの研究と発表の機会が無くなってしまうことが予想されたので、新しい発表の場をつくるつもりで立ち上げたホームページなのですが、実は、ライフワークにもなりうるものとして前々から企画していたことを実行に移したものもあるのです。今では、当たり前になっているインターネットですが、当時（10年前）は目新しい表現手段として登場して間もない頃であり、自分のつくったページが、直接、世界中のどんな人にでも見てもらえるなんてすごいことだと、その可能性にチャレンジしてみようと思ったわけです。

このサイトは、「社会実情データ図録」や私の名前でネット検索して、ご覧になっていただければすぐにわかるのですが、興味深い統計グラフ一つ一つを1ページにして、私のコメントをえた単純なものです。それまでの研究調査の中で、これは面白いぞ、みんなに見てもらう価値があるぞ、と思っていたグラフの掲載から始めました。当初、公開できた

のは1ページ1図録の図録数がまだ80足らずでしたが、その後、1週間に2図録、最近では1図録をアップするというテンポで新規図録の作成を継続し、9年経過した現在では1,000図録1,000ページを超え、また、人々に求められる情報を提供する結果となって月間100万ページビューを記録するまでになりました。広告収入源としても最初は小遣いにもならない位の少額でしたが、今は、大切な所得源になっています。

有り難いことに、この図録を見た出版社の編集者から、サイトの情報を元にして本にしないかという働きかけを受け、実際、サイトで取り上げたグラフのうち、相関図形式のものばかりを1冊にした『統計データはおもしろい！』という本と棒グラフを1冊にした『統計データはためになる！』という本をパソコンの解説本で有名な技術評論社というところから出してもらいました。また、今年の夏には、日経新聞の出版社から新書を出す予定で執筆を始めているところです。

このサイトは、あらゆるジャンルの統計グラフを扱っているのが特徴です。経済、人口、農業、食品、途上国開発、労働、教育、健康、観光、政治、地方、海外と統計データのあ

るすべての分野で、興味を引くデータを取り上げて図録ページにしています。

その中で、最近は、歴史もののデータ図録も取り上げています。例えば、人口については、日本でも世界でも紀元前後から現代まで、日本でいえば、縄文時代からといつてもいいのですが、日本全体で何人ぐらいの人口がいたのかという長期的な人口推移のデータが推計されており、これをグラフにして掲載しています。

最近は歴史学の中の1ジャンルとして、歴史人口学、また数量経済史という学問が発達してきています。普通の歴史学が、過去から嘗々として蓄積されている文字資料を読み解いて歴史を研究するのに対して、歴史人口学、数量経済史は、発掘遺跡や発掘物の集計、江戸時代の宗門改め、人別帳といった家族資料や村毎の石高の一覧表の集計、商家の勘定帳など、数値をピックアップできる資料から、首尾一貫したデータ系列を作成して、これを手掛かりに、これまでと異なった新鮮な視角で（当時、出生率がどのくらいだったのかとか、農民の生活がどうだったのか、どの地域が栄えていたのかなど）、分析していく学問分野です。

普通の歴史だとなかなか統計グラフにできるものは少ないのですが、こうした歴史人口学や数量経済史のデータはグラフにして、解説を加えることができるので、私もだんだん図録に取り上げるようになりました。私は大学のときに農業経済学を学んだと冒頭で申し上げましたが、その中でも、農業史の講座に属しておりました。私の仲間の中には歴史家になった人たちもいます。もともと歴史が好きで、現代を理解するにも歴史的な経緯が極めて大切だと思っているので、歴史データの図録にも力が入るようになったわけです。歴史的な人口推移やGDPの推移が中心ですが、服属した蝦夷（えみし）たちである俘囚の全国配置（9世紀）、全国の花柳界所属の芸妓人数（戦前）といった風変わりなものも取り上げています。

こうした歴史データの図録の一つとして、2011年11月に「北前船の船主たち」というページを作成し、公表しました。これは歴史学を専門とする名古屋大学教授中西聰さんが書いた『海の富豪の資本主義』（名古屋大学出版会）という本に整理されていた6隻以上の船をもっていたことのある50人・50家に上る北前船船主の一覧表を棒グラフにし、

それらの船主たちがどのような活躍をしたかについてコメントを加えたものです。

北前船に着目したのは、以前、内航海運の業界団体（内航海運組合総連合会）からの受託調査で、内航海運が日本の産業競争力に果たしている役割の大きさについて調査してほしいという依頼を受け、その結果、日本の産業競争力を支えているのは、内航海運ではないかという分析結果に至り、報告書にしました。それ以来、日本の海運の役割の大きさに着目するようになったのですが、江戸時代には、北前船という形態で海運が盛んであったということです。北前船については、歴史的エピソードというか郷土史的側面が強く、日本経済全体に果たした役割については今一つわからないところがありましたが、一般に思われているより、重要な役割を果たしていたのではないかという予想があったので、一覧表にしてみたわけです。

『海の富豪の資本主義』を見ていてビックリしたのは、図録にした船主一覧とは異なり、もう少し小規模な地方ごとの北前船主まで掲載されている表の中に、私の曾祖父の名前が登場したことです。母親の旧姓は「浜中」でしたが、表の中

に石川県塩屋村（現在の加賀市）の北前船主の一人として「浜中又吉」という名前が挙がっていたのです。私は母親から、曾祖父は、金沢と北海道岩内で活躍していた海産物問屋と聞いていたので、北前船主の名として登場したのには、正直、驚いたわけです。それまで、曾祖父が北前船主であったと認識していなかったなんて「これはしたり」でした。もちろん、曾祖父は、北前船の事業が斜陽となって、大正に入って、他の多くの北前船主と同様、北海道に転進し、岩内に事業の本拠地を移し、岩内倉庫という会社を経営し、その後、金沢に邸宅を建てたということなので、海産物問屋でもおかしくはないのですが、元北前船主だったかどうかはやはり重要なことです。

このように、母親の曾祖父は石川県塩屋村の北前船主でしたが、一方、私の父方の祖父は、富山県氷見出身の力士「黒瀬川」です。本名は「本川竹松」といい、氷見市の「上日寺」には碑が建っており、明日、見に行くつもりです。「本川」という名字は単純な割に全国的には珍しい名前なのですが、富山県の氷見市では多くの本川姓の方がおられ、みなさんの中には、もしかしたら「本川」と聞いて思い当たる名前だと

思われた方もいるかもしれません。

祖父は、漁師の家に生まれましたが、幼くして、親を失ったため、当時、内務大臣であった板垣退助が全国から集めた力士候補生の召集に応じて東京に出ました。家伝では、祖父をレストランに連れていった板垣退助から「こうやって使うんだぞ」とナイフとフォークの使い方を伝授されたそうです。昔の政治家は、相撲取りを連れ廻すのが、一種のステータスだったのだろうと想像されます。

このように、私の先祖は、父方は富山、母方は石川といずれも北陸出身であり、しかも、いずれも家は海の職業でした。友人らからは随分と「お前は声がでかいな」としばしば言われましたが、漁師や船乗りが先祖では家の声が大きいのが当然だったのでしょう。また、母親が作ってくれた正月のお雑煮は、前日から水につけておいた昆布だしに醤油を加え、これに餅を焼かずに入れ、温めてから削りたてのカツオ節を多量にかけるというそれだけのお雑煮です。正月に同じお雑煮を食べるという知り合いには出会ったことのない特殊なものでした。また、母親が子どもの頃、住み込みの書生を数人同居させ、シェパードを何匹も飼っていた金持ちの家のお嬢

様だったことは、北陸の豪商の孫娘だからだったといわざるをえません。母親は又吉の次男の娘だったのですが、次男にも資金を与え、東京で事業（ゴム靴の製造）を興させていたのです。又吉は、幕臣の娘と結婚しました。私の曾祖母です。維新の際、このお勝おばあさんは、まだ幼児でしたが、腰元の背中に負ぶわれて陸路で北海道に逃げ、五稜郭に立てこもつたそうです。こういう娘を教育があるからということで妻にし、事業を手伝わせたと聞いています。こうした諸々のことが、今の私のものの見方や生き方に影響を与えていくと思うと、先祖の生きてきた地域や職業に关心をもたざるをえません。

私が大学生の頃は、まだ、学生紛争が華やかなりし頃でした。当時の鼻息の荒い学生の間では、大企業やお役所に「寄らば大樹の陰」とばかりに就職するのは、意気地のない能力の低い学生のすることだと信じられていました。現在は、その逆ですね。そうした時代の影響もあり、私は大学院を出ても大学に就職する道は考えず、知り合いと小さな調査事務所を起こしました。その後、最初にお話をしたシンクタンクに勤めることになり、そこが解散して、また一人になったので

す。考えてみると、こうした人生経路は、時代の影響だけでなく、裸一貫で北前船や相撲取りという職業に従事した父祖から伝えられた家風の影響もあるのではないかと感じています。よく言えば、独立心旺盛、悪く言えば、一攫千金ねらいの気風があるように感じます。

NHKで著名人のファミリー・ヒストリーを放送局が調べて放映する番組がありますが、私のファミリー・ヒストリーは自分で調べるしかありません。北陸の富山や石川や北前船について興味が増した私は、自分なりの方法でいろいろと調べて、自分の図録にも掲載しました。それが、こちらの方にも知られることとなり、今日、ここに立って、皆さんにお話をしているというわけです。

1 富山の人の好むもの

前置きが随分長くなってしまったようだったので、本題に入りたいと思います。

私のサイトで図録を定期的にアップするためには、ストックをつくっておく必要があります。まず、私がこれから掲載

しようと思って準備している図録のネタを一つ紹介します。

お手元の資料の最初の「富山の人がとくに好んでいる食べもの」のグラフ（巻末資料①）をご覧ください。これは、総務省統計局が調べている家計調査の資料から採った統計データです。全国の二人以上の世帯でどのような品目が消費されているかを調べた結果です。

この家計調査というのは、全国の調査世帯に家計簿をつけてもらって集計している統計ですが、県庁所在地と政令市別に集計されています。これは有名な話ですが、宇都宮の市役所の人が、たまたま、宇都宮のギョウザの消費が日本一であることを発見して、市内の餃子屋さんに呼びかけ、B級グルメのまちづくりを行って成功したことで知られるきっかけとなったデータです。

以前に金沢についても同じようなグラフを作成したのですが、今回、富山市について作成してみて、非常に特徴的な結果でしたので、皆さんに紹介いたします。

グラフには、年間の消費金額、あるいは消費量が富山県が日本一の品目をすべて掲げています。毎年データは変動しますので、3か年（2008年から2011年）の平均を取っ

ています。そして、それらの品目について、「全国平均の何倍か」及び「第2位の市と比較して何倍か」という二つずつのデータを棒グラフにしています。「全国平均の何倍か」はどのくらい消費が多いかを表していますし、「第2位の市との比較」は、他の市から抜けていた特徴かどうかを示しています。第2位の何倍かという数値が低いと、必ずしも調査の度に1位とは限らないことになります。例えば、生じたけの消費は富山が全国一ですが、2位の金沢の1.01倍となっており、2位の市とはそれ程変わらないので、1位1位だと威張っても数年経つとそうでなくなってしまう可能性が大きいわけです。トップであると自信をもっていえるのは2位の市との倍率が高い品目なのです。

富山市の消費品目全国一は、多分、市の広報誌や地元新聞でトピックとして紹介されたこともあるでしょうが、全国平均とか2位の都市との比較というこんな形のグラフで紹介されたことはないと思います。見たこともないデータを紹介したり、見たことはあるけれども、こんな形で表したりしたのは見たことがないと皆さんに思ってもらえるよう努力して図録を作っているので、飽きられずにサイトへのアクセスが維

持されているのだと考えています。

富山市の消費品目の中でもっとも目立っているのは「ぶり」で、消費金額が全国の3倍、そして2位の市、これは金沢市なのですが、その1.3倍となっています。全国の何倍かということでは、「ぶり」の次に「魚介の漬物」、3位が「昆布」になっています。一方、第2位の都市の何倍かという点では、「昆布」が1.47倍と、他の品目を引き離しています。

このように、調べてみると、富山の特徴は、「ぶり」と「昆布」だということができます。「ぶり」は氷見の寒鯛が全国ブランドで有名です。また、江戸時代から全国に先駆けて稻作の副産物である藁を大量に使って作った定置網で鯛を捕まえ、能登の塩で塩鯛にして飛騨や信州、あるいは関西全域に出荷していた歴史があります。鯛は回遊魚です。九州から餌を求めて日本海側を北上し、夏に北海道沖でUターンして、戻ってくる途中で、能登半島にぶつかって入ってきた鯛を冬に漁獲するですから、富山のピカ一の地元産品といえるわけです。正月の魚として「ぶり文化圏」と「鮭文化圏」が有名で、糸魚川・静岡ラインで、東西の食文化を分けるといいますが、西の「ぶり」の根拠地、本場が富山であるわけで

す。

「昆布」の方は、栄養塩に富んだ寒流の親潮が到達する北海道と東北太平洋岸の海岸でしかとれない产品であり、地元产品ではないのですが、何故か、富山がダントツに日本一なのです。これは、北前船の歴史と北海道開拓に果たした越中人の歴史をひもとかなければ理解できません。

2 北前船が運んだ昆布

昆布の消費が富山に続いて多いのは、金沢、福井、堺、京都の順になっています。北陸三県の県庁所在地が上位3位を占めているのは何故でしょうか。1970年代の家計調査による昆布消費と昆布の産地や輸送の発達史を関係づけてトータルな構図を明らかにした研究が、北海道大学の昆布博士、大石圭一さんによって行われました。これを要約すると、北陸・近畿で最も消費量が多く、次にそれ以外の日本海沿岸一帯が続き、関東など太平洋岸は概して消費量が少ないという昆布消費の分布パターンが見られます。これは、4段階に分かれ生産量が10倍ずつスケールアップしていった北海道

における昆布産地の拡大と供給エリアの拡大に対応しています。

○第1段階、細目昆布時代、産地は松前～江差。用途はダシのみ。新潟まで。

○第2段階、宇賀昆布時代、産地は函館周辺。用途はとろろ昆布も。北陸まで。

○第3段階、真昆布・日高昆布時代、産地は日高まで。用途は昆布佃煮も。大阪まで。

○第4段階、長昆布時代、産地は道東まで。用途は煮食も。中国への輸出まで。

第1段階は、奈良・平安の時代で、第2段階は鎌倉・室町時代です。エリアが大阪まで広がった第3段階は、寛永16年(1639)の加賀藩による藩米の西廻り廻漕からです。中国まで輸出できるようになった第4段階は寛政11年(1799)の高田屋嘉兵衛によるエトロフ航路開拓から始まります。そして、各段階の生産規模が10t、100t、1,000t、1万t台と拡大して行きました。

国内は第3～第4段階で大体普及し、食文化的にも、ダシ、とろろ昆布、昆布佃煮と成熟し現代のかたちになりました。

北陸は、北海道から昆布を運ぶ北前船の根拠地であり、昆布の使い方をいろいろ開発した中心地となった関西食文化の影響も受け、関西より安く、昆布を得られたことから消費が最大となったと見られます。

しかし、北陸の中でも富山が抜けて昆布消費が多いという点は、なおこれだけでは説明がつきません。福井や石川にも北前船船主は多くいましたし、それらの地方の方が関西食文化の影響は強かったといえます。輸送費の差も北陸圏内でそれほどの差があったとは思えません。

これを説明するため、北海道漁業への越中人の出稼ぎが多かったことが要因として挙げられます。定置網（台網）が発達しなかった新潟地方の漁民を中心に明治10年（1877）頃から北海道に渡ってニシン漁に従事し、さらに明治20年（1887）頃から根室方面に昆布採取に出稼ぎし、その数は明治28年（1895）にすでに800人に達したといいます。富山では高級昆布で知られる羅臼昆布の消費が多いといわれますが、これは、明治期に羅臼の人口の8割を占めていた富山の移住者や出稼ぎ者が、昆布を故郷の親せきや知人に届けたため、富山での消費が定着したからだといわれます。その

他、北海道各地で昆布漁に従事した越中人が故郷に昆布を送ったことが消費日本一をもたらした要因だと考えられます。

大石さんが研究した1970年代のデータでなく、最近のデータで同様に分布を調べてみると、昔ほど、地域ごとの区別がはっきりしなくなっています。東日本でしか食べなかつた納豆が全国化し、西日本でしか食べなかつたタチウオが全国化したのと同じように、昆布消費も全国均一になりつつあるのだろうと考えられます。その中でも、富山の昆布消費は相変わらずの地位を保っており、地元に根づいた食パターンの頑強さを見て取ることができます。

昆布と富山県人のつながりは、こうした経緯で、富山が日本一の昆布消費となっているばかりでなく、幕末に、富山の薬売り兼北前船主が、薩摩藩の昆布密貿易を助け、間接的にですが、倒幕資金の蓄積を手助けして、明治維新の実現に貢献したことが挙げられます。富山では比較的知られていることのかも知れませんが、全国レベルではあまり知られておらず、これを知って正直私もビックリしました。

もともと、薩摩や長州は密貿易で蓄えた潤沢な資金を倒幕に使って明治維新を成功させたのであり、攘夷を薩長が唱道

した理由は、実は、幕府に鎖国を解いて開国されてしまっては、密貿易の利益が消えてしまうからだという京大の有名な中国史学者である宮崎市定さんの説がありました。したがって、政権を奪取した後は、ケロリとした顔をして開国を前提とした国造りに向かったというわけです。抜け荷、密貿易というのはあまり格好のいい話ではなく、また攘夷思想に純粹に共鳴して死んでいった仲間も多かったため、薩長出身の明治政府の要人たちは、密貿易を盛んに行っていたことには触れないようにしていたので、もともと資料を残さない活動であったこともあり、歴史上、忘れられたとされていたのです。

本当のようにも思えるけれど、果たしてそうかなと、かねがね考えていたら、先ほどふれた大石圭三さんが、道東の長昆布生産の段階になると、長崎経由の中国輸出向けにも昆布生産が行われ、しかもヨード不足で需要の大きかった昆布を中国に輸出して、中国から薬種を輸入する密貿易もかなり行われたという状況証拠を示し、富山県の高瀬保さん（富山市郷土博物館元館長※故人）、深井甚三さん（富山大学教授）などの歴史家が研究されて、ほぼかなりの程度でこうした活動が行われていたことが明らかになっています。密貿易は資

料を残さないのでなかなか明らかにできないのですが、難破船の処理資料や幕府や加賀藩等の摘発文書、また暗号で記した積み荷資料などから明らかになってきています。もともと薩摩藩は、長崎貿易の例外として対馬の対朝鮮交易とともに琉球を通じた对中国貿易を幕府の監視の元に許されていましたが、どうやら、許されていた範囲を大きく超えて中国と取引をしていたようです。こうして得た帳簿外の資金が、同じく帳簿外の公家の買収や銃器の購入などの倒幕資金に使われていたことがほぼ明らかになってきています。薬種の原料の入手ということから薩摩藩の蜜貿易に協力したのが富山の北前船船主であったことが明らかになりましたが、このほか、石川県の領域でも、もともと錢屋五兵衛の朝鮮人参などの密貿易の伝説が有名ですが、私の曾祖父の出身である大聖寺藩の北前船主なども密貿易に荷担していたようです。

北前船があるおかげで、東アジアワイドのウラ交易が盛んであり、しかもそれを北陸の船乗りたちが担っていたなんて、こんな興味深い話が何故北陸出身の親をもつ私も知らなかつたのでしょうか。維新政府の立場がなお現代にも引き継がれているのでしょうか。そういうことも考えられるでしょうが、

やはり、北前船の歴史的意義自体が広く認識されていないからではないかと思います。

3 ニシンとともに栄え、ニシンとともに衰退していった北前船

北前船の経済的な本質は何かを考えてみると、昆布輸送ではなく、やはり北海道の物産ですが、ニシン魚肥が重要だったといえます。ニシン魚肥を北海道から本土に運ぶことが儲かったから昆布も運んだのであって、その逆ではありません。何故、ニシン魚肥の輸送が儲かるようになったかを考えてみなくてはなりません。

そもそも江戸時代のはじめには、あまり魚の肥料は使われていませんでした。戦国時代から江戸時代にかけては新田開発が進み、農地面積が大きく広がった時期です。沢山のお米を生産するために農地を広げたのです。戦国大名の堤防づくりや河川コントロールの技術向上が大いに役立ち、大きな川の下流平野にも安定して営農が可能な広大な農地ができたといわれています。ところが、開発できる農地を開発してしまうと、今度は、肥料で生産性を上げるという方向に向かいま

す。魚肥が生まれる前は、日本は家畜が多くいませんから、緑肥、すなわち山や農地周辺の草を主な肥料としていました。人の糞尿も肥料になりましたが、メインにはなりません。

新田開発が進むと緑肥が得やすい山に近い場所だけでなく、山から離れた平場が開発し尽くされ、緑肥が得にくくなってきたことも、外部から魚の肥料を入れる必要が高まる理由でした。

江戸時代のはじめに、まず、開発された魚肥は、鰯を干した干鰯（ほしか）です。最初に干鰯を使い始めたのは、日本の中でも綿作がさかんとなった近畿地方です。そこで、近畿地方の漁民は、東の関東や西の九州に出掛けていて鰯を捕り、肥料にして持ち帰ったといいます。そのうちに、千葉の九十九里などで地元漁民が関西の漁民の技術を学んで鰯の肥料づくりを進めます。また、関東周辺の農村部でも干鰯を使う習慣が広がっていきます。

こうして、関東産干鰯（ほしか）の関西への供給は、享保年間（1716～1736）以後、20年間ほどの間に断絶に近い状況となりました。そのため、綿作地帯の関西では魚肥不足が深刻化しました。ここで、蝦夷地産のニシン魚肥の

導入が儲かると見て、北海道に乗り込んだのが、あの有名な近江商人たちでした。北海道からの輸送ルートも、先ほどふれた寛永16年（1639）の加賀藩による藩米の西廻り廻漕がやはり大きなメルクマールとなります。敦賀・琵琶湖経由ルートに代わって、大量物資輸送の可能な西廻り航路が開かれており、好都合でした。江戸時代のニシン漁業では、アイヌの人たちを安く使ったりして、生産コストが低かったので、北海道から長距離を運ぶコストを考えても、十分に引き合うこととなり、幕末には近畿をはじめ全国的にニシン魚肥が干鰯肥料を圧倒して、それに代わる中心的な魚肥になりました。

（砺波平野の魚肥年表）

- ・寛文年間（1661～1673）に、草刈場を得にくい新田で干鰯導入
- ・18世紀には干鰯が古田にも進出
- ・文化14年（1817）には鰯魚肥は微々たる量
- ・天保5年（1834）には3～4割鰯が占めるようになる
- ・天保から慶応（幕末）には、鰯魚肥は急減、鰯魚肥は倍増

魚肥によって米の反収は2倍になったという資料もあります。すると、農家にとっては、米の値段の半分以下なら魚肥を入手するために使ってもペイする勘定です。農業がメインの産業である当時の日本にとっては、巨大なビジネスチャンスが生まれたといえるでしょう。そう考えると「一航海千両」といわれた北前船の利益の源泉はニシン魚肥というドル箱商品の存在にあるのです。

北海道から北陸沖、山陰沖を回って瀬戸内海へ入り、大阪に到達する輸送ルートの荷物を上り荷、反対方向の荷物を下り荷といいますが、利益は、主として上り荷にあったといわれるのも頷けます。

当初、北海道の近江商人は、一部、自分の船で北海道からの产品を運んでいましたが、多くは「荷所船（にどこぶね）」という名の共同チャーター一船で運んでいました。これは加賀や越前、若狭の運賃積み廻船です。「荷所（にどこ）」とは、敦賀の荷物扱い所のことであり、敦賀の問屋が荷主である近江商人と荷所船の船主の間に立って廻船の運用や積み荷の売買を担当していました。現代の内航海運でも、荷主の鉄鋼業や石油精製業の子会社や専属契約を結んだ海運業者が製鉄所

や石油精製所から全国の港へ鉄鋼や石油を運んでいますが、これと同じだと考えられます。近江商人は、北陸の船乗りにお金を貸して船を作らせて、輸送に当たらせていましたのだと思います。

北海道における近江商人の漁場独占がくずれていき、また船乗りが運賃商売で資金を蓄積するに従って、これらの北海道からの運送船も、運賃を貰う「荷所船」から自分で荷物の販売を行ういわゆる「北前船」として独立するようになります。

北海道との交易品とともに大阪まで回送される藩米も西廻り航路の中心貨物でしたが、越中（富山県）の場合は、藩米廻漕に従事していた近畿、上方の廻船に雇われていた水夫、船頭が独立して、北前船の船主になったものも多いようです。

関西の農村で栽培されていた綿、藍、砂糖などの商品作物向けの魚肥だけでなく、北陸の米作地帯でも魚肥の需要も高まってくると西廻り航路の丁度中間に位置する北陸の北前船船主は大きく成長していくことになります。

北前船の盛衰をグラフであらわしたものがお手元の資料（巻末資料②）の中にあります。

北前船がどれだけ行き来していたかを示す資料が船員たちの世話をしたり荷物の取引をしたりする船宿の「御客船帳」記録です。1744年から1758年に至る時期には、毎年、19.2隻の船が、この浜田（現在の島根県浜田市外の浦）の清水屋に登録されていたということです。これが、時期ごとにどのように推移していったのかを見たもので、これを見ると、安政6年（1859）から明治11年（1878）の時期には、毎年102.4隻の船が入ってきていたということです。19世紀から急に増え始め、明治維新の前後あたりにピークになつていったことがわかるかと思ひます。その中でも、当初は、船籍を分析すると、最初は近畿とか、山陽の船が多かったのですが、19世紀に入ると、北陸がぐんと伸び、全体でも増えていることが、グラフではっきりとわかります。

他に、ここでは掲げていませんが、島根県壱岐や山形県酒田の資料もありますが、分析してみると、同様な動きを示しています。

これを見ると、北前船の活躍は北陸船主が最多となった文化文政期（1804～1829）以降に目立つようになり明治維新前に最盛期を迎え、19世紀末まで継続した後、衰

退したというおおまかな動きがうかがえます。

北前船の勃興は、西廻り航路の発展とニシン肥料というドル箱商品の登場で説明できますが、それでは明治維新前後に最盛期を迎えて、その後、衰退していったのは何故でしょうか。これもニシン肥料の衰退が大きな理由です。

開国・明治維新をきっかけに日本は世界市場と直接つながることになりました。すると関西地方の綿作、藍作などが輸入綿糸・綿織物との競争で衰退していきます。ニシン肥料の需要の重要な一角が崩れて行くわけです。ただし、富山のような米作地帯ではなお大豆粕肥料や化学肥料が拡大するまでは、ニシン肥料をさらに多く必要としました。一方、鉄道との競争が始まります。大阪から富山まで北陸線が開通したのは明治32年（1897）です。こうなると富山と大阪との交易は鉄道に取って代わられます。こうして、北陸の北前船は、北陸と北海道の間のピストン輸送のような形に単純化していました。北前船主は、明治末年にかけて、蓄えた財を①金融機関など地元経済に投下するか、②肥料の小作農向け販売の利益を兼ねて土地を兼併し大地主になるか、③北洋漁業など北海道に事業拠点を移すか、転身を迫られることになりま

す。私の曾祖父は、大正14年（1925）には岩内に移住し、漁場を所有し、また岩内倉庫という会社を立ち上げました。

こうして、北前船は、ニシンとともに起り、ニシンとともに衰えたというのが私の見方です。

4 北前船輸送によって全国一になった新川木綿

次に、北前船輸送によって富山に全国有数の綿織物産地が成立していたお話をしましょう。

お手元の図（巻末資料③）では、江戸時代に生産高20万反を超えたことがある全国の17の木綿織物産地の生産量をグラフにしました。江戸後期、木綿の普及に伴い、多くの産地が勃興し、明治維新前後の動乱の中で、滅びていった産地もあればもう一度生産を拡大していった産地もあります。富山の新川木綿は一時期全国一の生産を誇りましたが、明治になって急速に衰退した産地の代表格となっています。

こうした歴史事象を知って、まさか北陸にそんな大きな木綿産地が成立していたなんて思いも寄らなかつたのでビックリしました。富山の新川木綿は北前船輸送によって全国一に

なっていたのです。

調べてみると、北前船が瀬戸内海を抜けて運んだ原綿を新川郡一円の農家が織って白木綿にし、これを松本の足袋の产地に売って、松本から全国に出荷されていました。幕末時点では、100万反の生産のうち、50万反をこうして他国へ出荷、残りの25万反を高岡で藍染めなど製品化して他国出荷、残りの25万反を地元で消費していました。

新川木綿の経済的役割は大きく、大雑把にいうと、加賀藩のGDPの半分が第2次産業でその半分が新川木綿といった計算もされています。

もともと信州松本で足袋の生産を本格化したのは、養蚕が盛んになって普通の木綿織物では儲からなくなつたからですが、明治以降、生糸の輸出が本格的になると、ますます養蚕・生糸に傾斜していった結果、足袋づくりは衰退し、連動して新川木綿も衰退していったということです。グラフをみると衰退の勢いが非常に明確です。

貿易で世界市場と直結したことによって、明治以降、国内で完結していた分業がグローバル化しました。綿花や綿糸の輸入により、綿花の生産や藍の生産は衰え、生糸が輸出品の

トップとなつたため養蚕が盛んとなりました。これに伴つて、西日本から東日本への生産シフトが起こります。新川木綿の衰退は、輸入木綿との競争ではなく、こうした産業構造の急激な変化に伴うものだったといえます。

5 北前船経済圏の歴史的意義

これまでいろいろお話してきたように、北前船関連のエピソードには興味深いものが多く、それらが、だんだんと明らかになりつつありますが、それでは、全体として北前船は、いったいどのぐらいのインパクトを当時の日本経済に与えていたのでしょうか。この点については、なかなか、従来の文献資料を読み解く歴史学では語られません。ここにデータ分析の出番があります。しかし、現代と異なつて、江戸時代後半から明治にかけては、国勢調査もないしGDP統計もなく、国交省の物流調査もありません。ただ、幸運なことに徳川吉宗が享保改革の一環として始め、その後、6年おきに子(ね)の年と午(うま)の年に幕末まで継続的に行われた全国人口調査の結果だけは残っています。現代は国勢調査も5年おき

であり十進法の世界となっていますが、当時は十二支をあてた十二進法の世界なので、6年おきなのです。これが十分に活用されているか、この度、検討してみました。

徳川幕府が命じて各藩が調査した統計というと、何か胡散臭い感じがしてしまいます。現代の中国や北朝鮮の政府が意図的に発表する一部の統計と同様、とても信じられないのではないかという第一印象があります。最初の享保6年（1721）の全国人口は、2,606万5,425人となっています。これには、武士や公家の人数は入っていません。武士の人数は軍事機密であり、明らかにされていません。また、この調査は、幕府が代官や諸藩に命じて、それまで行ってきたそれぞれの方法で人口を数えて報告せよ、というものでしたから、金沢藩のように15歳以下は含まず、和歌山藩のように8歳未満は含まず、といった対象年齢の制限があります。僧侶や被差別民も含まれていない場合が多くなっています。除外人口がどのくらいだったかという研究が行われていますが、確かなことはわからないので、調査人口の1.2倍して当時の日本の人口にするという便法が通用しています。江戸時代後半の人口約3,000万人はこうして求められているのです。

ところが、よくよく調べてみると、各藩は、宗門改めで人別改めの経験を積んでいます。全ての者がキリスト教徒ではないことを確認するため、毎年、個々人の帰属を記録していました。これは近代以前としては世界にも稀な徹底ぶりです。また、幕府が求めているのは人口の変化であることを各藩は理解していたようであり、最初始めた対象年齢の制限はその後も毎回変えずに人口を調べています。定義が異なっていても同じ定義で調査が継続されれば、結果は有用なのです。

調査の末端の村々では、藩や幕府報告用に正本を一部作成して提出しますが、それと同じ内容の副本を村に保存し、毎回、村民の出生、死亡、転入、転出をこの副本に付箋に貼るように添付記録し、次回の調査に備えていたといわれています。

したがって、人口の増減数については、かなり、正確なのではないだろうかと思われます。

全国人口の記録は、125年間、22回中、19回分が残り、地方人口は125年間、12回分が残っています。

お手元のグラフ（巻末資料④）は、残っている数字から江戸時代後期の人口の推移を指標で表したものです。全国人口

は、ほぼ横ばいとなっており、これが、江戸時代後半の人口は停滞的だったとされる根拠になっています。また享保の飢饉、天明の飢饉、天保の飢饉といった天災による人口減少も数字に捉えられています。全国は停滞的でも、地方により、動向はまったく異なっていたことが知られています。北陸と北陸の中の国別に動向を示しました。北陸の中で越中・越後でも、天明の飢饉の後は、大きな人口増加が起こっていることがわかります。

人口の推移

	1721年 (享保6年)	1834年 (天保5年)	2010年 (平成22年)
全 国	3,128万人	3,248万人	12,700万人
北 陸	257万人 (8.2%)	317万人 (10.2%)	561万人 (4.4%)
越中・ 富山県	8万人 (1.2%)	48万人 (1.5%)	112万人 (0.9%)

次のグラフ（巻末資料⑤・⑥）では、地域別の人口増減を平常期間と災害期間に分解して示した図を掲げています。

災害年の人口減少は、東日本ほど大きく、西日本の近畿以外では減少していないことがわかります。災害が寒い地方を中心にダメージを与えていたことがうかがえます。

また、資料⑤では、平常期間を含めて、大阪を含む近畿・近畿周辺、及び江戸を含む関東で人口減少が激しかった点に、現代とは正反対の傾向を見て取ることができます。これは、

「都市蟻地獄説」というものであり、近代以前では、洋の東西を問わず、都市の衛生環境が悪く、死亡率が高かったため、またしばしば都市の勤労者は独身が多かったので出生率も低かったことから、人口は地方から吸い寄せられなければ、都市で凹んでいく傾向があるのです。

こうした減少要因を取り除いた平常期間だけの人口動向を見てみると、見事に北前船経済圏ともいべき地域で人口が大きく増加していることがわかります。特に、北前船のメッカともいるべき北陸では、この間、60万人と全国最大の人口増となっています。

次のグラフ（巻末資料⑥）で、平常期間の人口増減を前半

と後半に分けてみると、北陸や山陽の後半の人口増が目立っています。また、災害期間を3つの飢饉に分けてみると、享保飢饉と天明飢饉では、人口減の東日本傾斜が明確ですが、天保飢饉では、北陸や山陽・山陰を含めて、むしろ、北前船の影響が大きい地域で人口減が目立っています。北前船を通じて伝染病がこの圏域に広がったための人口減がうかがえます。明治時代には、開国に伴って、コレラとかが入ってきたので、そういうものの前触れが起こっていったことがわかるのです。

このように、人口統計をきちんと分析してみると、北前船経済圏ともいるべき地域では、北前船の時期的な盛衰や地域別の北前船の影響の大きさに対応した人口の増減が見て取れます。これは、ちょうど、戦後の高度経済成長期に、臨海工業地帯が発達し、鉄鉱石あるいは石炭、石油を海外から運んできて、それを加工して、また輸出していくという日本経済が発展していた時期があるわけですが、その結果、太平洋ベルト地帯に人口が集中し、北陸を含む日本海側が相対的に衰退していった時期を思い出させます。それほど北前船は大きな経済的インパクトをもっていたと結論づけることができる

でしょう。当時は、富山などの北陸地方が全国の経済の成長を引っ張っていたといつてもよろしかろうと思います。その巨大な遺産が、現在の富山の食生活の特徴にも残っているし、また私のような、先祖が北陸から出てきた一族の生活にまで影響を及ぼしていることが理解されると思われます。

最後に全国を渡り歩いて、日本人の生活を分析した民俗学者の宮本常一が気がついた日本海側と太平洋側との違いの観察を紹介しましょう。

彼は、昭和21年（1946）に、東北地方を、福島～宮城～岩手～下北半島～弘前（津軽半島）～秋田～山形～米沢～東京と民家に泊めて貰いながら巡回したそうです。そこで気がついたのは、太平洋側では濁酒も漬物もふるまわれなかつたのに、津軽以降の日本海側では、毎回、それらが出てくるという経験をしたというのです。彼は北前船から川船に積み替えて運ばれた樽や壺といった重たい容器の普及の差が酒や発酵食品の普及の差を生んだと分析しています。

まことに、北前船経済圏は地方理解のキーワードといえるでしょう。また、日本の近代以降の経済発展のファーストステップとして、重要な歴史的役割を果たしたといえます。密

貿易の話と同じく、江戸時代の功績をなるべく低く見積もる傾向のあった明治維新政府の見方から離れ、客観的に見てみると、北前船の実際の経済的な意義が、よりよく見えてくるのではないかでしょうか。

ご清聴、有り難うございました。

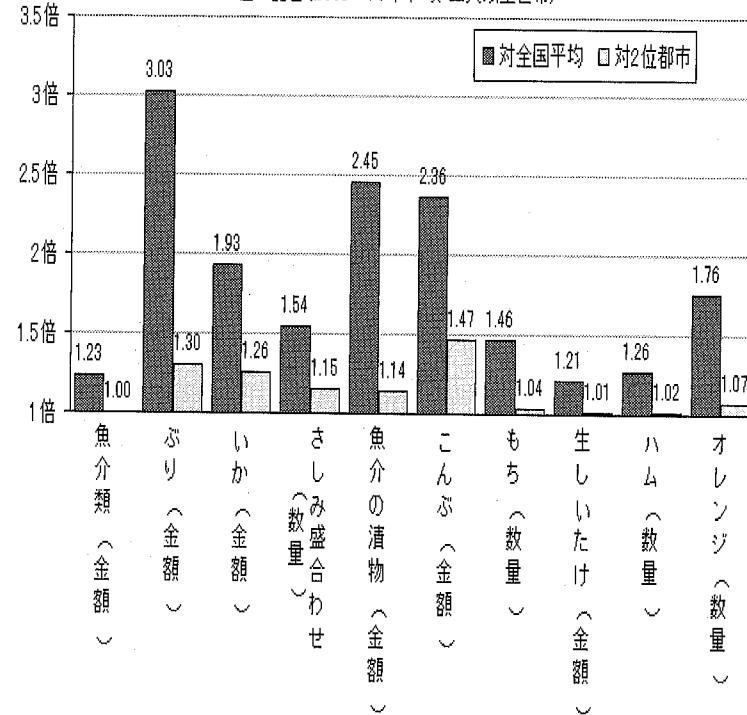
(平成25年4月19日富山市民大学開講式における特別講演筆録 文責編集者)

巻末資料

<資料①>

富山の人がとくに好んでいる食べもの

富山市の世帯当たり年間支出金額・購入数量が全国51県庁所在市・政令市の中で
1位の品目(2008~10年平均 二人以上世帯)

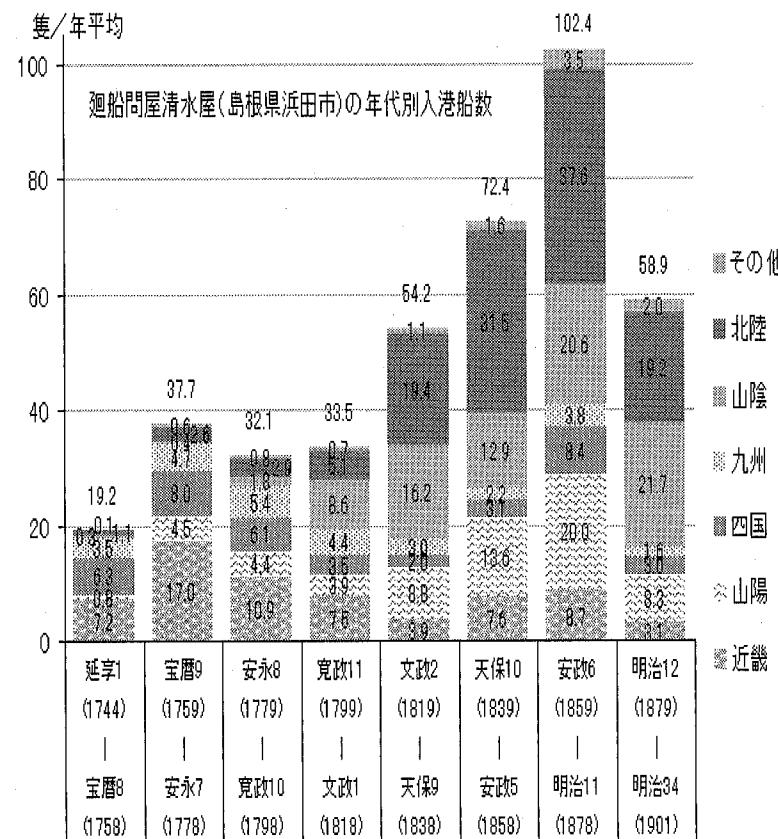


(注)金額と数量の両方で1位の場合は金額を掲げた。「魚介類」は「生鮮魚介」、「塩干魚介」、「魚肉練製品」、「他の魚介加工品」の計。「魚介の漬物」は「魚介類のみそ漬、しょう油漬、味りん漬、あわ漬、酢漬、糠漬、かす漬及びマリネ。」

(資料)総務省統計局「家計調査」

<資料②>

北前船船籍の盛衰



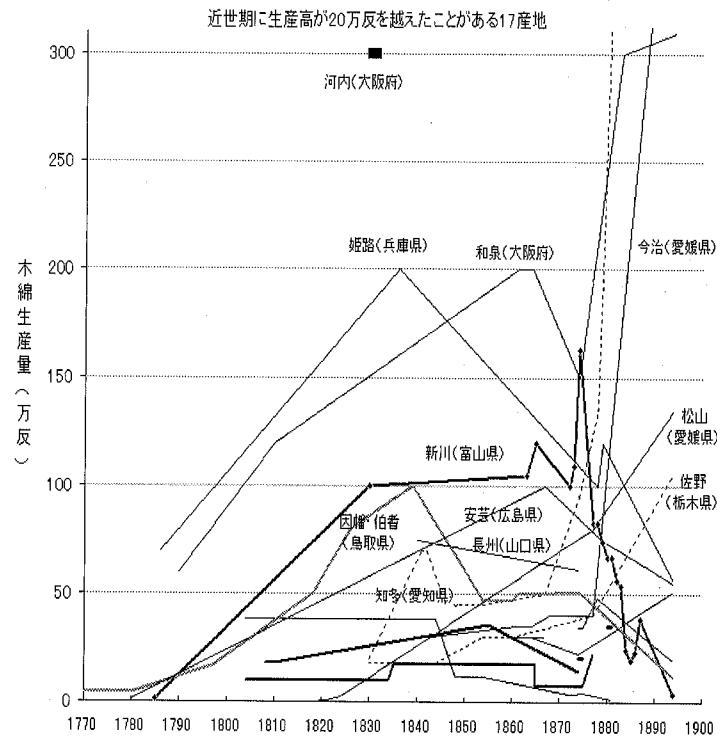
(注)柚木学(1982)「海運資料としての入船帳と客船帳」(『交通史研究』第7号)による。

「その他」は東北・松前・関東・東海。

(資料)宮本又郎・上村雅洋(1988)「徳川経済の循環構造」(『日本経済史1 経済社会の成立』岩波)

<資料③>

主な綿織物産地の生産高の推移(18~19世紀)

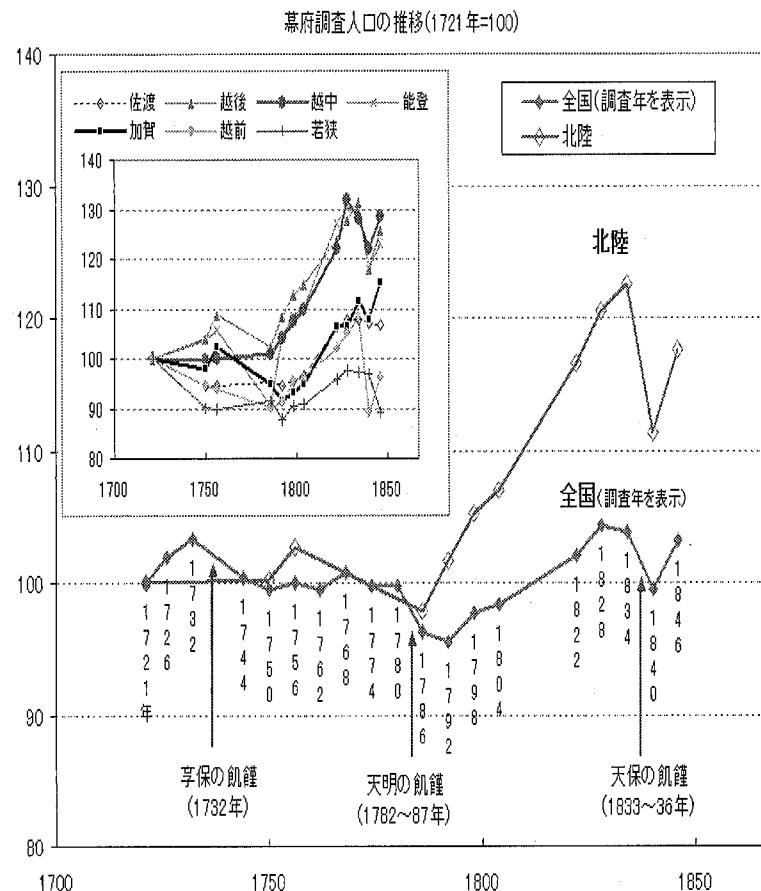


(注)阿部武司(1988)による。ただし、「新川」は谷本(1998)による。明治期は斎藤・谷本(1988)で補完。「知多」の1874年以降は三河を含む愛知県の数値。「和泉」の1874年、1894年は河内を含む大阪府の数値。なお、図に示されているように各論文が原資料としている1874(明治7)年「府県物産表」では「新川」は163万反と大阪府150万反、愛知県95万反を上回る全国一の白木綿産地となっている。姫路(1786)は新保博・長谷川彰(1988)による白木綿大阪入荷量。

(資料)阿部武司(1988)「近世日本における綿織物生産高」(尾高煌之助・山本有造「幕末・明治の日本経済」日本経済新聞社)、斎藤修・谷本雅之(1988)「在来産業の再編成」(梅村又次・山本有造編「開港と維新」日本経済史3)岩波書店)、谷本雅之(1998)「日本における在來的経済発展と織物業」名古屋大学出版会、新保博・長谷川彰(1988)「商品生産・流通のダイナミックス」(連水融・宮本又郎編「経済社会の成立(日本経済史1)」岩波書店)

<資料④>

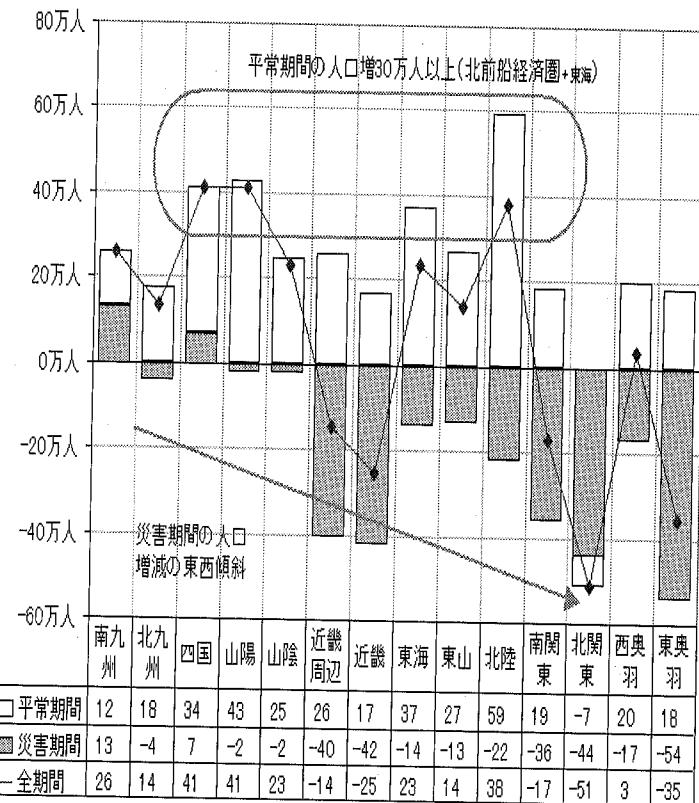
江戸時代後期の人口推移(全国と北陸)



(注) 幕府が行った6年おき全国調査(子午年調査)25回のうち全国は19回、地方は12回のみ調査結果資料が見つかっている。
(資料) 関山直太郎(1958)「近世日本の人口構造」、速水融(2009)「歴史人口学研究」第3章付表

<資料⑤>

江戸時代後期(1721~1846年)の地域別人口増減

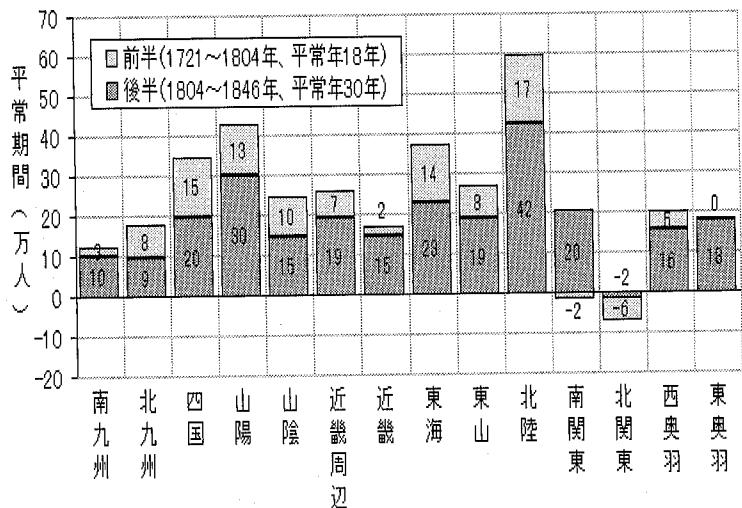


(注) 德川幕府による6年毎の人口調査の地方別(国別)結果がベース。災害期間は1721~50年、1756~92年、1828~40年とし、全期間の人口増減から災害期間の人口増減計を引いた残りを平常期間の人口増減とした。北陸には越後を含む。東山は甲斐、信濃、飛騨の計。

(資料) 速水融(2009)「歴史人口学研究」第3章付表

<資料⑥>

江戸時代後期(1721~1846年)の地域別人口増減(平常期間と災害期間の内訳)



(注)(資料)同上

《略歴》

神奈川県生まれ。

東京大学農学部農業経済学科、同大学院修了

財団法人国民経済研究協会 常務理事研究部長

シンクタンクで地域農業調査・計画、自治体調査

・計画、産業調査、開発援助調査など多くの分野の調査研究に従事。

現在

アルファ社会科学株式会社 主席研究員

立教大学 兼任講師

「社会実情データ図録」サイト主宰



幅広い分野の統計データをグラフ化して一般公衆による事実に基づく議論に役立てようとするインターネット・サイトを運営しながら、企業調査、地域調査等に従事。

《著書》

『統計データはおもしろい！相関図でわかる経済・文化・世相・社会情勢の裏側』(技術評論社 2010)

『統計データはためになる！棒グラフから世界と社会の実像に迫る』(技術評論社 2012)

祖父（父方）は富山県氷見市出身大相撲力士元関脇黒瀬川。

曾祖父（母方）は石川県加賀市塩屋出身北前船船主浜中又吉。

平成25年7月31日発行

編集・発行 富山市教育委員会

市民学習センター

〒930-0084 富山市大手町6-14

印 刷 所 (有)ヤツオ印刷

〒939-2374 富山市八尾町上高善寺946

市民大学叢書

■既刊

- | | | |
|--|------|-------|
| 1 社交と日本文化 | 和子俊子 | 正あき子 |
| 2 女歌の世界 | 秀房正彰 | 馬加角山 |
| 3 二十一世紀の日本文化 | 和一進 | 崎場藤田 |
| 4 私たちの時代の歴史 | 三 | 山崎伯西 |
| 5 地域の時代の文化 | | 佐中吉 |
| 6 外から見た日本文学 | | 田健 |
| 7 家持における伝統と創造 | | 杉本邦治 |
| 8 国際化時代の日本 | | 木村馬場 |
| 9 小寺菊子
－人と文学－ | | 子美あき子 |
| 10 心の時代・ことばの時代 | | |
| 11 文学のこころ | | |
| 12 郷土の文学者 素琴 志田義秀をしのぶ
「恩師 素琴 志田義秀先生の師徳をしのんで」
「父を語る」 | | 古郷延 |
| 13 旅先からみた日本 | 郷義郎 | 志田森 |
| 14 アメリカから観る日本 | 郎雄 | 本大河原 |
| 15 父 角川源義を語る | じゅん | 見辺野 |
| 16 狂言の面白さ | 作人 | 下公 |
| 17 ソフトに考えよう未来 | 芒吾 | 日季 |
| 18 中国人の見た日本文学 | 志 | 黒岩 |
| 19 源氏鶴太氏を語る | さと | 木重 |
| 20 国際化時代の文化 | | 木忠 |
| 21 生きること信ずること | | 木崎 |
| 22 日本人のこころ
－信仰のすがた－ | | 真継伸彦 |
| 23 郷土の先賢 内山逸峰・内山外川をしのぶ
「内山逸峰翁の万葉思慕をめぐって」
「内山逸峰・内山外川から学ぶもの」 | | 廣瀬誠 |
| 24 地域の教育力と青少年の育成 | | 内菊 |
| 25 芝居の魅力
－佐々成政の劇化をしつつ－ | | 島地 |
| 26 近代日本の女性の生き方 | 春彦 | 宮賀春彦 |
| 27 賴山陽とその志業について | 登新 | 賀頼生 |
| 28 戦後教育の回想と展望 | 男義 | 江義 |

- | | |
|---------------------------------|-------|
| 29 情報化時代と教育 | 木田宏 |
| 30 江戸文学にみる人間の生き方
－雨月物語を中心に－ | 大輪靖宏 |
| 31 女いまステキな人生
－女性から変わる価値観－ | 犬養智子 |
| 32 環境と文化
－民族学の立場から－ | 松山利夫 |
| 33 なぜ私たちは歌うのか | 三善晃 |
| 34 ヨーロッパと日本の間
－文化地理学的再考－ | 水津一朗 |
| 35 生きる
－私の歩いた道を通して－ | 藤原てい平 |
| 36 日本の文明史について | 山上春 |
| 37 生涯学習時代の到来
－今、どう実践するか－ | 瀬沼彰雄 |
| 38 幸せって何だろう？ | 古克和 |
| 39 足の裏は語る
－現代人の健康と寿命－ | 平沢一郎 |
| 40 日本の心 | 高沢好胤 |
| 41 小倉百人一首と歌がるた
－みやびの伝統－ | 犬盛宗作 |
| 42 無生死の道 | 永村理 |
| 43 古代エジプトの謎 | 吉原興治 |
| 44 高齢化社会と学ぶよろこび | 千葉眞理子 |
| 45 中国の皇帝と后妃 | 菅昭彦 |
| 46 海から学んだ私の宝物 | 千弓 |
| 47 古代航海と日本海文明 | 古通 |
| 48 普通に生きる
－向田邦子の人と作品－ | 久光彦 |
| 49 閣屋から哲学へ
－人はいかにして哲学はじめめるか－ | 世元 |
| 50 現代文明と古代 | 西ら木中 |
| 51 もう一つの物差し | 屋守ひ |
| 52 中国古典に学ぶ人間学 | 村方洋 |
| 53 動物から学ぶ | 守中 |
| 54 人生遠まわり | 勝元宏 |

55	金子みすゞの宇宙 —みんなちがって みんないい—	夫 恵誠子
56	痛みからの解放	二 真海
57	生き生き人生の特効薬は『独創丸』	夫 正枝
58	共生時代の男と女	史伸
59	大伴家持の越中・能登紀行	英子
60	大昔と私たち	二 風之
61	こころの花びら	智 善
62	シドニー、固体そして21世紀	時 光
63	森と人の未来	治 克
64	花と芝居と私	悦 冬
65	心の癒しと文芸	法 美
66	くらしの目線で見えること	鶴 穂治
67	喜劇映画のできるまで	明 伸
68	私のシネマライフ	信 博
69	戦国武将に学ぶ知恵	成 子
70	心やわらかに 今を生きる	美 文
71	感染症に備える	之 文
72	ふるさと北陸に心寄せて	宏 穂
73	鶴英ちゃんの修羅場介護日記	穂 治
74	心地よい 日本語	和 伸
75	どうなる日本	正 伸
76	中高年の危機『脳は若返る』	山 伸
77	考えないヒト	田 伸
78	ここが面白い 日本語の歴史	田 伸
79	忠臣蔵の真実	田 伸
80	脳の本質から学ぶ 違いを認めて共に生きる幸せ	山 伸
81	中国古典小説の愉しき世界 —『三国志演義』『西遊記』『水滸伝』『金瓶梅』『紅樓夢』	林 伸
82	富山方言を通してみる遠い縁・近い縁	井 波
83	「時を読み、時を乗り超える」	山 律
	安田善次郎の経済哲学	山 敏
84	富山藩と加賀藩 一分家の歩んだ道のりー	渡 房
85	北前船経済圏の歴史的意義	見 和
	～統計データ分析家によるルーツ探訪～	川 男
		裕 雄